



発行所

一般社団法人 全日本木材市場連盟
編集・発行人 小島 隆也
東京都文京区林友ビル6階
〒112-0004
電話 03(3818)2906
FAX 03(3818)2907
毎月1回1日発行
定価 年3,000円
(会員は会費に含まれています。)

第48回JAS展表彰四社
に農林水産大臣賞

(一社) 全国木材組合連合会、(一社)
全国木材市場買方組合連盟及び (一社)
全日本木材市場連盟は、令和3年2月3
日(水)第48回JAS製材品普及推進展
示会の受賞者を決定し、公表した。当初
予定していた表彰式・記念講演会は、新
型コロナ禍による非常事態宣言もあつて
中止となった。各受賞者には、賞状等が
送られた。

【審査結果の講評】 信田 聡審査委員長
(日本木材加工技術協会会長) の講評
は、以下のとおり。
1. 農林水産祭の林産部門として、昨年
の8月から11月まで5会場で全木連、
全市連、全買連主催の「第48回JAS
製材品普及推進展示会」における出品
製品の審査を行ってきた。協力いただ
いた主催3団体、各会場における審査
委員とオペザーバの皆様、含水率等の
測定をいただいたFAMICの皆様
様に厚く御礼を申し上げる次第。おか
げで厳正な審査と総合調整ができた。
2. 今年度の出品数は71(昨年度49)で、
前年度比22件増。出品量も前年度比2

8.6㎡多い608.8㎡。出品数、出品量
ともに大幅に増加し、1件当たりの出
品量も昨年度の3割増しの8.6㎡と
なった。

3. 今年度の出品は、初めて2×4材が
1品出品され、残りは全て製材で、機
械等級材は39%と昨年度と同じであ
つた。

4. 審査結果は、満点が7件(同6)と
昨年度並みで、出品数の増加を踏まえ
ると、満点を取れる出品が減少する傾
向が続いている。

5. 審査は減点方式で行われるが、その
原因で目立ったものは昨年度同様、格
付実績での減点が6割もあり、この割
合が続いていることから、JAS規格
に基づく品質管理が適切に実施されて
いると解釈することができ。一方、

製材技術では鉋盤の刃先管理不足によ
ると思われるナイフマークの粗さによ
る減点が見られたほか、品等
において規定と異なる表示となってい
るものがどの市場においても散見され
た。乾燥不足は11%程度で昨年度
(14%)より少なくなり、9割近くの
製品の含水率管理が規格通りに行われ
ていた。

6. 総合調整審査の結果、農林水産大臣
賞4件、食糧産業局長賞12件、林野庁
長官賞16件を決定し、推薦した。天皇
杯を戴いた実績のある機関は、その機
会を譲るといふ審査の申し合わせがあ
ることから、大臣賞に推薦されないこ
とになる訳だが、今年度はそれに該当
する製品が3件あり、特別感謝状を授
与することとした。主催3団体の会長
賞として21件を審査の申し合わせに従
い選考した。また、優良市場さん3件
と優良買方さん5件についても申し合
わせに従い感謝状を贈呈することとし
た。受賞された機関の皆様には心から
お祝い申し上げる。

7. 審査を終えての全体的な講評だが、
JASの基本的要求事項における減点
が昨年度より目立ったので、品質管理
をさらに徹底して欲しいと思う。等級
格付については、効率よく生産してい
る中で、その境界付近での格付判断は
困難を極めるので、画像認識と含水率
計測を合体させた「格付の自動化」が
安価なシステムで実現できれば、より
適切で効率的な評価になるものと考え
る次第である。

【農林水産大臣賞】 4点 受賞工場名(県
名)
株式会社杏澤製材所 製材工場(秋田県)
山下木材株式会社 製材工場(岡山県)
東濃ひのき製品流通協同組合(岐阜県)
株式会社さつまファインウッドかごしま
JAS製品流通加工センター(鹿児島
県)

【食料産業局長賞】
牧野木材工業株式会社(岡山県)
院庄林業株式会社久米工場(岡山県)

有限会社倉地製材所(岐阜県)
株式会社オオコイチ(三重県)
有限会社マルヒ製材(岩手県)
八幡浜官材協同組合製材工場(愛媛県)
株式会社東海木材相互市場(愛知県)
株式会社武内製材所(大分県)
高知おおとよ製材株式会社(高知県)
都城木材株式会社宮村工場(宮崎県)
ウッドファースト株式会社徳島製材工場
(徳島県)

【林野庁長官賞】
外山木材株式会社今町工場(宮崎県)
中国木材株式会社鹿島工場(茨城県)
協和木材株式会社(福島県)
中国木材株式会社本社工場(広島県)
二宮木材株式会社(栃木県)
大林産業株式会社(山口県)
エンジンニアウッド宮崎株式会社加工セン
ター(宮崎県)

伊藤林産有限公司(岐阜県)
株式会社佐藤製材所(宮城県)
株式会社山長商店(和歌山県)
株式会社丸七ヒダ川ウッド(岐阜県)
グリーンウッドタクミ協同組合ウッドピ
ア工場(三重県)

株式会社日田十条(大分県)
小林製材株式会社(岡山県)
齋藤木材有限公司製材工場(三重県)
有限会社菊池製材所(岩手県)
丸川木材株式会社(茨城県)
【主催3団体会長賞】
かつら木材商店(和歌山県)
東白川製材協同組合(岐阜県)
交吉製材株式会社製材工場(岐阜県)
飛騨高山森林組合(岐阜県)
宮内林業株式会社(宮崎県)

サウウッド宮崎協同組合木材加工センター(宮崎県)

金子製材所株式会社(埼玉県)

株式会社ヤマサ(大分県)

株式会社吉田産業吉田製材工所(宮崎県)

木脇産業株式会社加工センター(宮崎県)

株式会社松島木材センター(熊本県)

熊本モルター加工事業協同組合(熊本県)

有限会社東部産業本社工場(福岡県)

柴木材株式会社(富山県)

越井木材工業株式会社(茨城県)

株式会社北条(宮崎県)

桑原木材株式会社金山工場(岐阜県)

上球磨森林組合加工工場(熊本県)

鳥越工業株式会社(岡山県)

江与味製材株式会社(岡山県)

田村木材工業株式会社(広島県)

### ■第24回全市連国産材需要拡大製材品特別展示会開催

全市連、木曾木材工業協同組合(麦島照幸理事長)及び木曾官材市売協同組合(勝野智明理事長)は、1月23(土)、第24回全市連国産材需要拡大製材品特別展示会を木曾官材市売協同組合において開催した。新型コロナ禍の中での開催で、式典は、行われず、林野庁長官賞等の入賞材が発表された。

◆林野庁長官賞(天然木曾檜板盤 長3・0m、厚10・0cm、幅46・0cm) (株)勝野木材 ◆長野県知事賞(高)木曾ひのき鴨居一式)のむら木材(株) ◆中部森林管理局長賞(高)木曾ひのき板盤一式)池田木材(株) ◆全日本木材市場連会長賞(天然木曾檜板盤一式) (株)井上 ◆長野県木連理事長賞(天然木曾檜

節板一式)志水林業製材。審査は、前日の1月22日に木曾官材市売協同組合会議室で、8名の審査員によって、厳正に行われ、入賞材が決まった。長官賞受賞材については、「樹齢300年の歴史から作り上げられた、無地、色合い、年輪の目通りの良さと、凜とした存在感が評価され、全員一致で決定した」。

初市には、新型コロナ禍の中、約60人の買方様が参加。先行きの不透明観もあって、価格は伸びなかったが、それでも天然木曾檜(桎盤)2m×14cm×7・5cm四方無地に170万円/m<sup>2</sup>、天然木曾檜(板目)2m×40cm×4・8cm4面無地に130万円/m<sup>2</sup>の最高値があった。出品材135m(1、560口)の内、販売材積67m<sup>3</sup>と前年並みとなった。総売上額は、1、530万円、平均単価22万8千円となった。

### ■国土交通省 2021年度予算(概要)

国土交通省は、2021年度予算決定概要を公表し、新型コロナへの社会経済対策と大規模自然災害への対応を推進し、ポストコロナの新たな日常を実現することとしている。東京一極集中の是正で地方創生・多核連携型の国づくりへの転換を図り、テレワーク環境の整備やデジタル化などを推進していくというも。国費総額の一般会計は5兆8981億円(前年度比0・01%減)、20年度第3次補正予算を含めると9兆1893億円(同0・55%増)。施策の中心課題は、「国民の安全・安心確保」、「持続的な経済成長の実現」及び「豊かで活力ある地

方の形成と多核連携型の国づくり」の3本柱。住宅局関係予算は21年度当初予算が1573億円(前年度比0・02%増)、20年度第3次補正予算が31億円で、合計1604億円(同0・04%増)。重点施策は、住まいの安全確保、住宅ストックと流通市場形成、セーフティネット、生産性向上と新技術実装の4つからなる。目玉となる住宅・建築物における「新たな日常」への対応として、住宅団地等におけるコワーキングスペースの整備により、テレワーク環境への整備を支援。

また、既存ストックの有効活用・市場の活性化では、安心R住宅制度や住宅リフォーム事業者登録制度などの施策の普及を支援。更に、建築分野におけるIT活用・リモート化を普及促進する。21年度第3次補正でグリーン住宅ポイント制度(国費1094億円)、すまい給付金(同777億円)の予算を付けた。引き続き、大工技能者育成事業に国費5億円(前年比100%)、地域型住宅グリーン化事業に国費144億円(同0・04%増)と21年度第3次補正で国費10億円を計上した。

### ■新設住宅着工、4年連続で減少

国土交通省は、2020年通年および20年12月の建築着工統計を公表した。同年の新設住宅着工戸数は81万5千戸(前年比9・9%減)と、4年連続で減少した。新設住宅着工床面積は6、645万平方メートル(同11・2%減)で、こちらも同じく4年連続の減少となった。利用関係別では、持家が26万1千戸

(同9・6%減)と再び減少に転じた。貸家は30万7千戸(同10・4%減)で3年連続の減少となった。分譲住宅は24万戸(同10・2%減)で6年ぶりに減少した。うちマンションは10万8千戸(同8・4%減)で反転減少、一戸建住宅は13万1千戸(同11・4%減)で5年ぶりに減少した。構造別では、木造は46万9千戸(同10・3%減)となった。特に2×4が9万3千戸(15・2%減)と落ち込みが大きくなっている。ここ数年、総数の減少に比べ、木造の減少は緩やかだったが、2020年については、木造の減少率の方がやや大きいのが気になるところ。

三大都市圏の圏域別では、首都圏が総数28万3千戸(同8・2%減)。内訳は持家5万5千戸(同6・4%減)、貸家11万8千戸(同5・2%減)、分譲住宅10万9千戸(同12・1%減)。中部圏は総数9万5千戸(同13・8%減)、持家3万9千戸(同10・4%減)、貸家2万9千戸(同18・5%減)、分譲2万6千戸(同15・6%減)。近畿圏は総数13万戸(同5・7%減)、持家3万3千戸(同10・2%減)、貸家4万9千戸(同6・6%減)、分譲4万7千戸(同1・9%減)となっている。

12月単月の新設住宅着工戸数は6万5、643戸(前年同月比9・0%減)と、18ヵ月連続で減少した。新設住宅着工床面積は538万5、000平方メートル(同7・9%減)で、17ヵ月連続の減少。季節調整済年率換算値は78万4、000戸(前月比4・2%減)となり、3ヵ月ぶりに減少した。



### ■木材輸出の動向

財務省が公表した貿易統計によれば、2020年1月から12月までの木材輸出総額は、356.8億円(前年比3.2%増)と世界的に新型コロナウイルス禍の影響を受ける中であって、微増した。品目別には、丸太163.4億円(同11.1%増)、製材品・加工材70.4億円(同11.9%増)、合板57.7億円(同10.8%減)、その他53.1億円(同5.1%減)となった。輸出数量は、丸太は138.4万m<sup>3</sup>(前年比22.5%増)、製材・加工材は17.5万m<sup>3</sup>(同16.8%増)、単板・薄板は47.9万m<sup>3</sup>(同45.4%減)、合板は10.7万m<sup>3</sup>(同7.8%減)であった。国別には、中国が356.8億円(同7.0%増)で輸出総額の47.7%を占め、第2位のフィリピン64.9億円(同12.7%減)、第3位米国38億円(40.9%増)、第4位韓国30.1億円(3.2%増)であり、米国が韓国を抜いて第3位になった。最大の輸出相手先である中国については、新型コロナウイルス等の影響により前半の輸出量の減少が大きかったが、6月以降は前年を大幅に上回るペースで輸出量が増加した。

米国向け輸出については、住宅着工が高水準で継続しており、また、日本からのスギフェンス材の輸出についても好調に推移し、製材品・加工材の輸出額については、米国が26.2億円(同101.1%増)と全体の37.1%を占め、中国を抜いて第1位となっていることが注目される。

### ■木材アドバイザー制度について

令和2年度については、毎年恒例の木材アドバイザー講習会も新型コロナウイルス禍には、勝てず、誠に残念ながら、中止となってしまいました。

改めて、全市連時報の紙上で、本制度について、ご紹介いたします。

1. 木材アドバイザー制度創設の趣旨

我が国は古くから、木の文化を育み、性質の異なる木材を、適材適所に使用し、丈夫で快適な建物を建ててきた。しかしながら、平成20年代当初、森林・林業・木材等及び木造建築に関する総合的な知識等を学べる機会は少なく、先人の知恵が木材や木造建築に係る方に広く理解され、社会に十分に伝えられているとは言いがたい状況にあった。一方で、木材利用・木造建築への関心が高まる中、木業界として、木材に関する情報を工務店、設計者等に提供していくことが大切であるが、木材や木材利用について、適切な助言ができる人材は少なく、その育成が急務であった。このような状況下で全日本木材市場連盟は、それまで木材利用のPRや品質規格の明確な木材の利用拡大等に取り組んでいたが、木材や木材利用についての助言・指導ができる人材を養成し、「木材アドバイザー」として認定して、その任に当たっていただく制度を平成23年度に創設した。なお、この制度は、東京木材市場協会が、平成22年度に実施した人材養成事業を引き継いだものです。

2. 木材アドバイザー講習会の実施

木材アドバイザー養成のための講習会は、木材を取り扱う方々等を対象に環境問題や木材需給、日本の林業のほか、木の見分け方や木の基本的性質、木造建築に関する実践的な知識を幅広い分野で学んでいただくため、2日間のスケジュールで「木材アドバイザー養成講習会」として開催しています。当講習会は、直近の3年間、日本建築士会連合会のCPD認定プログラムともなっており、建築士の方にも当制度を利用して参加いただいている。今年で11年目を迎え、延べ受講者は約900名弱となっている。基本的には、毎年2月に、関東(東京)及び関西(大阪)で開催してきたが、令和2年度講習会については、新型コロナウイルス禍の中、開催中止となったところです。

当初は、木材市場関係者主体の参加であったが、最近の例で、令和元年度講習会の受講者は、木材流通関係者36%、木材加工関係者15%、森林組合関係21%、建築・設計関係者7%、森林インストラクター10%、国及び自治体等行政関係者2%などで、幅広い分野から参加している状況がうかがえる。受講者の中には学生時代に講習会に参加し、木材アドバイザーの資格を得ただけでなく、それを契機に木材研究の道に進み、進路に大きな影響を受けた方もあるとのこと。

3. カリキュラム等

講師を始めとする当養成講習会の企画運営は、森林・林業、木材、建築などの分野で、第一人者の方々に御協力をいただいている。それぞれの分野に知識をお持ちの方には、「ホー、あの人が」と思っていただけの方々ばかりです。

現在の講義カリキュラムは、2日間で7科目、原則1科目90分で、総講義時間620分、大学での1単位の講義をギョツと圧縮した内容となっている。資格試験も実施されるので、過酷なスケジュールであるが、内容については、このような分野に携わっておられなかった方にも判りやすいものとなっています。

中でも木材の見分け方に関する講義は、全国の大学等でも、ここまで内容が充実しているものは少なく、楽しんでいただける内容となっています。

4. 講義の概要

令和元年度実施の講師と講義内容は以下の通りである。

(1)「地球環境保全と森林・木材利用」講師・森川 靖(早稲田大学名誉教授)

①地球カレンダー、②エネルギー(熱と仕事)、

③コモンズの悲劇、④自然のシステム、⑤量で考える、⑥植物の生長と光合成、⑦環境影響、⑧ギルガメッシュ叙事詩、⑨日本の自然環境とマツ、⑩生物の多様性、⑪熱帯林の再生

(2)「日本林業の動向と課題」講師・赤堀楠雄(林材ライター)

①林業の現状(増加する森林資源、林地集約化で供給体制整える、境界把握が喫緊の課題、所有者の意向の汲み取り、自伐林家、間伐材、皆伐再造林の推進、新たな森林管理システム、林業労働災害)、

②木の価値を高め林業を活性化(回復する自給率、「安い木」ばかり求められない、重要視されない価値創出、良質丸太の需要増に期待、必要な人

材育成

(3)「木材需給の動向と木材産業」(日本産スギフェンス材対米輸出の現状と課題)

講師・遠藤日雄(NPO活木活木森 ネットワーク理事長)

①ここ数年、なぜ米国で日本産スギフェンス材の需要が増加したのか? その背景、

②日本産スギフェンス材輸出の2つのタイプ(タイプI日本産スギ丸太を中国へ輸出、タイプII日本産スギ丸太を日本で製材加工し、米国へ輸出)、

③タイプI・タイプIIは今後どうなるのか(米中貿易戦争を視野に入れその行方を探り、「世界の木材需給の動向と日本の木材需給の見通し」を考える。)

(4)「木について知っておくべき事柄」講師・岡野 健(東京大学名誉教授)

①気候変動と木材利用

②樹木と木材

③針葉樹材と広葉樹材の違い(道管と仮道管)

④辺材と心材の違い

⑤心持ち材はなぜ干割れるか

⑥木材の性質が繊維方向と繊維垂直方向と異なる理由

⑦重い木軽い木の違い

⑧樹種が違うと何が違う(木理、肌目、耐久性)

⑨木材はどんな時腐るか

⑩材の変異(あて材、未成熟材等)

(5)「木の見分け方の基本を学ぶ(ルー

ペによる木材の見分け方)」

講師・杉山淳司(京都大学大学院教授)

①初めに

②道具立て

③木のなまえ

④木材とは・樹木の構造・木材の各部位の名称

⑤識別のポイント ア針葉樹のポイント(年輪パターンと樹種(晩材・早材)、ヒノキ科とマツ科を見分ける特徴(樹脂道と樹脂細胞) イ広葉樹識別のポイント(環孔材、散孔材、放射孔材及び放射組織等)

(6)「木造建築・木造住宅を知る 木造建築・木造住宅を科学する」講師・大橋好光(東京都市大学名誉教授)

①中大規模木造 ア公共建築木材利用促進法 イ 国交省「木造計画・設計基準」

②木造建築の構造形式の種類と特徴

ア集成材構法 イ4つの住宅構法(木造軸組構法、ツーバイフォー構法、木質プレハブ構法、丸太組構法) ウ構造設計のルート

③建物に加わる力(加重・外力の種類、固定加重・積載荷重・積雪荷重・地震力・風圧力・応力の組み合わせ)

④木造建築の構造設計・木造建築の構造性能の特徴・壁量設計等、

⑤各部の設計

(7)「木材に対する建築側の期待」講師・栗田紀之(A/EWORKS 理事)

①建築材料としての木材の特徴(軽い、比強度高い、異方性、狂う、腐る。

虫が喰う、燃える、欠点がある、樹種により性質異なる(適材適所)、性能にばらつき等)

②建築材料に木材を積極的に使う時代(公共建築物等木材利用促進法、人工林は、伐って使うべし)

③木造建築と耐震・耐風 ア木造建築は圧倒的に軽く、地震には有利なはず イ建築基準法の耐震規定 新耐震、大改正 ウ建築基準法の前提

工住宅性能表示制度(耐震等級、耐風等級)

④木造耐火建築物・準耐火建築物 ア「構造耐力上主要な部分」と「主要構造物」イ木造耐火建築物

⑤軸組構法の壁量計算 ア構造計算イ壁量計算 ウ軸組構法接合部はピン構造 エ「壁倍率」・存在壁量(地震力・風圧力)

⑥柱の引き抜き

⑦集成材等⑧羽柄材

5. おわりに

これまで木材アドバイザー資格試験に合格された方は、延べ888名に登る。この制度が少しでも木材供給側と木造建築並びに消費者との相互理解が深まり、合理的な木材利用に貢献できることを祈っている。令和3年度講習会は、是非開催したいと考えており、この紙面を借りて、今後とも皆様のご支援をお願いする次第です。

訂正

全市連時報第752号2頁2段目右6行目「9月9日」とありますのは、「11月9日」の誤りですので、訂正します。

雑記帳

化石は動物の骨や殻等固い組織の部分を主とし、鉱物に置換されて残っているものが多いが、昆虫の外骨格がそのまま残っているものもある。昆虫の外骨格はキチン質で非常に丈夫で物理的・化学的に安定し、土中に埋もれた後も長期に渡り残り続ける。専門家は、その体節の一部しか残っていないとしても、その種類を見分けることができるそうだ。植物食昆虫には特定の植物だけを食べるスペシャリストと多くの種の葉茎を食べるジェネラリストがあるそうだ。スペシャリストの昆虫が遺跡から発見されると、当時その遺跡の周りにどんな植物が生えていたか推測できるという。桑にはクワハムシ、柳にはヤナギハムシといった具合に。愛知万博の会場の1万6千年前の地層からは、トドマツキクイムシの羽などが確認された。現在は北海道や東北に自生する針葉樹の倒木等を食害する昆虫である。当時は最終氷河期末期、東海地方でも相当寒冷な気候だったようである。昆虫の化石だけでも当時の環境について多くのことが判るようになってきている。長い目で見ると気候等の変化は寒くなったり、温かくなったり、変化の幅は大きかったようだが、時間的には比較的緩やかで、植物も動物も環境の変化に同じ徐々に種が入れ替わったり、気候に順応したりしてきたようである。最近の急激な温暖化はヒトを含めた生物が適応できる速度を超えているとも言われ、「昔、ヒトという生物がいたらしい」とならぬよう対応が急がれる。